「富坂プレディガーゼミナール」準備会

富坂プレディガーゼミナールの構想

岡田　仁

はじめに

1884年6月5日、ワイマールにおいてドイツとスイスのプロテスタント教会による「普及福音新教伝道会」(Allgemeiner evangelisch-protestantischer Missionsverein)が発足した。翌85年にスイス人宣教師ウィルフリード・シュピンナーが派遣され、日本での宣教活動を開始した。普及福音新教伝道会は1922年に「東亜伝道会」(OAM)と改称し再出発する。1948年に元ドイツ東亜伝道会宣教師エゴン・ヘッセルが「財団法人基督教イースト・エイジャ・ミッション」を設立するが、以降、OAMはSOAMとDOAMに分立し、スイス(京都を中心に活動)とドイツ(東京を中心に活動)に分かれて活動を行うことになる。富坂キリスト教センター(以下、富坂)は1976年にDOAM主導によって設立され、1982年よりキリスト教社会倫理の学際的研究活動ならびに相互牧会研修が始まった。富坂は、2012年から公益財団法人基督教イースト・エイジャ・ミッションの一事業体として活動を継続し、2022年11月現在までに45冊の成果刊行物(研究書や資料集など)を世に出した。

「キリスト教社会倫理の諸問題の学際的研究」というスローガンができあがったのは、富坂が研究活動を開始してからである。最初の「キリスト教と社会制度(天皇制)研究会」が示すように、戦前からのキリスト教会の内実を天皇制との関係において神学的、歴史的、法学的に反省し、戦後のキリスト教会の悔い改めの姿勢を学問的に定着させていく学際的方向が、その後の研究方法となっていった。これはドイツのハイデルベルクにある福音主義学際的学術研究所 Die Forschungsstätte der Evangelischen Studiengemeinschaft e.V.(FEST)の学際研究方法を一部踏襲したものである。その後、平和・人権・環境など公益に資する共同研究会が生まれ、現在までに約300名の大学教員、牧師、医師、各専門家、カトリック修道女各位の協力を得て、聖書の福音に根ざした社会倫理研究会が45以上もうまれた。

2003年4月から富坂牧師研修企画委員会に参加する機会を得た筆者は、2006

年4月から2009年2月まで、NCCドイツ教会協力委員会（当時）の推薦を受け、EKD（Evangelische Kirche in Deutschlandの略・ドイツ福音主義教会）奨学生としてホフガイスマル・プレディガーゼミナール（牧師研修所・以下、PS）に留学した。その報告をする前に、これまでの富坂牧師研修の歩みについて少し触れておきたい。

1. 富坂牧師研修制度の歴史と理念

富坂は、1982年から1992年までの十年間、小規模の牧師研修会とアジア諸教会相互理解のための研修会を行っていたが、その後、1992年度から研究会のみの活動となった。しかし、1990年代から定着した研究活動のみの活動に、それまで10年間実行してきた牧師研修制度を加えて、研究・研修が相互に影響を与えるシステムに作り変えていくべきではないかとの意見が出てくる。鈴木正三総主事（当時）によると、2000年度から立案した牧師研修制度構想は、その後の準備段階から、若い牧師を指導していく牧師たちを中心に、非常に強い関心と設置への願いを感じてきたという。

鈴木は沖縄、四国、奥羽、関西、東京、九州など、全国のいくつかの地域を訪問し、この課題について各現場の教会に仕える50名以上の牧師たちと面談を行っている。当時、長崎地区の教会に仕えていた筆者もこの時の福岡での懇談会に参加した。このとき鈴木が思い描いていた構想は、富坂の研究成果としての各出版物、そして、富坂がそれまで関係を持ってきた韓国、中国、ドイツの教会との研究交流が役立つであろうという内容であった。当初、牧師研修制度は、各地に小さな研修場所を設け、その地域の先輩牧師を中心に十名前後で構成し、年間で合計1ヶ月間の研修期間とする方式が考えられ、そこで基本構想を作成する企画委員会を作るに至ったのである。

第1回将来構想委員会（2001年9月4日）では、牧師研修制度の設置によって、①富坂の活動を研究会と牧師研修の二本柱とする。②従来の研究会数を減らし、研究会経費を増額させ、研究内容を充実させる。③牧師研修制度を、日本基督教団を中心に、卒業後数年後に最大一年間、地域においてキリスト教社会倫理問題を中心にした多様なカリキュラムを、エキュメニカルな形で設立する。④財政は財団基金を中心に、奨学金、委託資金、募金、献金によるものとし、⑤研究会部門と牧師研修部門は相互に批判・協力関係を持つ。その形は、富坂セミナーとする。以上が、2000年から2002年までに検討されていた「富坂牧師研修制度の基本的

考え方」であった。

つぎに、「富坂牧師研修制度の基本姿勢」を当時の記録から概観する。

1、箴言に「主を畏れることは知恵の始め」(1：7) とあるように、教会は神を畏れることから神の知恵を会得していく。われわれが主を畏れ、愛するのは、主なる神ご自身が、まず、私たちに十字架の愛（ヨハネ第一 4：19）を与えてくださったからである。このような形の愛を下さった主を畏れずにいられるであろうか。この主以外に神はいないと（出エジプト 20：3）告白せざるを得ない。牧師が主を畏れつつ歩む訓練を積むことにより、知恵を身につけ、練達と勇気と希望を取り戻すことを目的とした研修制度を発足させたい。

2、この研修制度においては、主を畏れることは「小事に忠」（ルカ 16：10）なることから始まることを学びたい。掃除をすること、食事を作ること、朝の祈りと沈黙、あいさつ、人を尊重することなど、共同生活における基本的な「へりくだり」を学びたい。その上にのみ「大事に忠」なる生き方、日本の将来を思い、教会と国家の問題に大胆に発言し、世界と共生する生き方が生まれるのであって、その逆ではありえない。この聖書の順序を身につけていきたい。

3、その上にたって、「大事」な教会の様々なテーマ、伝道、教会教育、諸課題を牧会上の問題として取り上げ、先輩牧師の知恵に耳を傾ける時を持ちたい。伝道方法、ユニークな教育内容、牧会事例によって、教会が歩んできた道を学びたい。

4、さらに諸外国のキリスト教会が受け継いで来た知恵の言葉を、直接それらのエキュメニカルな教会から聞く時を設けたい。そしてしずかに黙想したい。知識の量を競うような議論は極力さけたい。このことは特にエキュメニカルな教会関係者との共同生活から学ぶことだからである。「われらの国籍は天国に」（ピリピ 3：20）あり、エキュメニカルな教会の関係はこの天国とわれわれの教会との関係に基礎を持っている。日本の教会がまず先にあり、その教会を土台にしてエキュメニカルな教会があるのではない。すでにこの世に勝利している神の国とその教会があり、それを土台にして、各国の教会、日本の教会があるのだ。

5、それらの知恵に学んだ行動を大胆に行う勇気を養いたい。この世には様々な苦難があるが、「勇気を出しなさい．私はすでに世に勝っている」（ヨハネ 16：33）とのみ言葉に導かれて、私たちは歩む。

6、これらの内容をカリキュラムとして具体化する方法は、その地域、地域で異な

るだろう。実際にその地域に役立つ伝道方法を実行してみる、エキュメニカルな共生を感謝する祝祭的礼拝を企画してみる、沈黙の祈りを実践する山登りを計画する、説教を作って、日曜礼拝で行い、その結果を研修生同士で話し合う、あるいは牧師同士のカトリック的相互告解の必要について話し合う、等々いろいろな試みが考えられる。一年間で1ヶ月間のカリキュラムを実行し、検討しつつ、より良い研修プログラムを作り上げていきたい。

7、単に知的な研修、グループ（教派的、同士的な）研修ではなく、牧師の生き方、暮らしのことも含めて、相対的に、生活を一定期間ともにしながら霊性を養う。基本は、「神を畏れ、神のみを神とする」これを軸に行ってきた。

8、日本の教会は、文化を頼りにして宣教を行ってきたのではないか。しかし今日、教会よりもこの世のほうが文化的にはある意味で進んでいる。牧師本来の在り方を考えるとき、福音そのものに立って、霊的なものをふまえて、様々な牧会上の課題を聴きあい、共感し、語り合うことが大切であろう。教団とのかかわりはもちろん大切だが、その流れや実情に左右されないことを確認している。

9、エキュメニカルな教会が、キリスト教会である。この聖書的理解に立つことが大切だ。「個々の教会があって、そこから一致して神の国へ」ではなく、その逆である。「神の国があって、キリストのからだなる一つの教会があって、各地に個々の教会がある」この聖書の信仰に立って、はじめて我々は個々の教会の働き、その存在のとらえ方が変わってくるのではないか？私は日本人、男性、牧師で、それがクリスチャンになって、その日本人が他の国のクリスチャンや問題とどうかかわるか、という問題意識でやっている限り、問題は表面的なキリスト教文化的なかかわりで終わるだろう。ゆえに、牧師の基本を学ぶとは、そういう基本的なことを、いかにわれわれが捉え直すのかということであろう。

上記の基本姿勢をふまえて、富坂牧師研修企画委員会（池田伯委員長・荒井仁主事）が2002年に設置され、現地準備委員会との連絡により2003年から2010年までに、八甲田、鹿児島、松山、佐渡において地域研修会が実施された。またヴッパタール神学大学のベアトールト・クラッパート教授をお招きしての合同研修会を2006年、2010年の2回にわたり開催した。さらに2013年以降は、沖縄宣教研究所との話し合いにより、富坂とのエキュメニカルな共同研修会を沖縄にて計4回開催してきた。詳細については、「富坂だより」「紀要」などの報告書を参照されたい。

2023年2月には、これまでの共同研修会を総括する意味で、第5回共同研修会が沖縄宣教研究所と共催で行われる。この間に筆者自身が考えてきた課題をあげるとすれば、富坂は、沖縄の牧師・信徒との共同研修を大切にしつつも、果たして当初の願い通り、沖縄と対等な共同研修がどこまでできてきたのかという点である。富坂、つまり、ヤマト側が沖縄から学ぶ必要がある一方で、十年前に饒平名長秀先生が指摘された「沖縄は長い間ヤマト（本土）の消耗材にされてきた。沖縄の状況は良くなるどころか悪化している。沖縄と東アジアの解放をぬきにしてヤマトの解放はない」との訴えにどう応えてきたのかを考えさせられている。つまり、「共同」との言葉に甘えて、沖縄に依存する形での非主体的な研修であってはならず、真の意味における「共同」研修会にするためにも、足もとであるヤマトでの主体的な教会形成、そのために必要な牧師養成・訓練が富坂として求められているのではないか。

したがって、この沖縄宣教研究所とのエキュメニカルで豊かな研修をとおして示されているのは、富坂における主体的かつ独自の研修を実施していくことである。国内外の協力を得ながらも、ヤマトの問題はヤマトの責任で解決をはかるべきである。本来ヤマトが担うべき負担や課題をこれ以上沖縄に押し付けて負わせ続けるようなことがあってはならない。こうして、沖縄の諸教会との対話のなかで準備されているのが、富坂プレディガーゼミナール構想である。富坂では2000年の時点ですでに将来の日本におけるエキュメニカルな牧師研修の実施を展望しつつ、歴史あるドイツのプレディガーゼミナールに日本から牧師を実際に派遣し、研修体験させることを計画していたのである。

2. ドイツ福音主義教会 EKD をめぐる社会状況と宣教の諸課題

2006年に富坂と NCC からドイツ留学の推薦を得た筆者は、国立大学入試（外国人枠）条件を満たし、正式に EKD 奨学生としてカッセル近郊にあるホフガイスマル・プレディガーゼミナール（以下、PS）で日本から派遣されたエキュメニカル・コワーカーの牧師としておもに実践神学を研究・研修することが承認された。PS 所長ヨヘン・コルネリウス＝ブンドシュー博士とそのご家族、研修主事たち、牧師補、牧師、町の教会の信徒たち、保育園や学校の先生がたはもちろん、故パウル・シュナイス DOAM 会長やルツ・ドレッシャー EMS 幹事（当時）の物心両面にわたる支援を抜きに家族をドイツに招いての研修をおこなうことは不可能であった。信仰篤い人格者たちとの国境を超えた出会いと交流は、エキュメニズムやディア

コニアの本質が何であるかを筆者に具体的に映し示す鏡のようであった。

当時、旧東ドイツと西ドイツのあいだでも歴史的な違いはいうまでもなく、経済格差など切迫した問題がベルリンの壁崩壊後も残存していた。教会も歴史的には負の側面を抱え、社会における諸課題に直面していた。教会税を納めず、教会退会を希望するキリスト者が1980年代から急増する。教会墓地ではなく、樹木葬、つまり大自然の森の木の下に埋葬されたいと願う信徒も増えているときく。このようにドイツの教会に突きつけられた挑戦はいくつもあった。カトリックとプロテスタントをあわせて、2008年当時ドイツの人口67パーセントがキリスト者である（2022年11月現在、約50％という）が、礼拝出席率は年を追うごとに減少傾向をたどり、当時の平均出席率は現住陪餐会員の3.8パーセントだった。

筆者が滞在したホフガイスマルの教会は、宗教改革以前に建てられた築860年以上の会堂で礼拝をおこなっていた。会堂の天井は非常に高く、町の中心部にあるもっとも古い建造物として補修を繰り返しながらいまも使われている。数百人が一度に入れるような広さだが、日曜日の朝はガランとしている。信徒3,000人規模の教会を一人の牧師が牧会をしている。牧師がすべての信徒を訪問することは物理的に難しく、一度も顔を合わせたことのない信徒もいるという。ある牧師は4,5の教会を兼任していた。都市部では、イスラム教徒の急増により、モスクを建造するか否かの議論は珍しくない。ドイツでは、他宗教との共生や対話だけでなく、ネオナチによるヘイトクライムなど外国人への差別や排斥の動きも、教会にとって祈りの課題となっていた。

こうした危機的な状況についてEKDは、統計などによる客観的な分析を参考にしつつも、それら諸課題を悲観的諦観的に受け止めるのではなく、教会に対するチャレンジやチャンスとして前向きに積極的に受け止めようとしている。さらに、この世においていま教会がなすべき業が何であるのか、神からどのような使命や委託を受けていかなる方向にむかって宣教は、教育、社会奉仕に従事するべきなのかを真剣に検討している。EKD奨学金担当者が筆者に強く勧めた留学先はゲッチンゲン大学神学部であった。しかし、自分自身の牧師としての研鑽を積むためといった個人的な動機以上に、ドイツ教会がどのような教会を形成し、信徒や牧師たちはどのような役割や責任を負うのか、そして、そのための訓練はいかにしてなされているのかについて学び、それらを日本にもち帰ることが富坂から課せられた課題であり、留学の目的であることをEKD奨学金担当者に直接伝えた。半世紀以上留学生を受け入れてきたが君のような奨学生は初めてだと驚かれたが、

さいわい、学識豊かで人格的にも大変優れた所長ヨヘン・コルネリウス＝ブンドシュー博士（私の帰国後、ドイツ・バーデン州教会監督に選出される）の指導を受けることが晴れて許され、実践神学の研究・研修所であるホフガイスマルPSで学ぶことになったのである。このPS研修を筆者に強く勧め、ブンドシュー所長と事前に何度も交渉をしてくださった鈴木正三元総主事と旧富坂理事会に改めて感謝する次第である。

今日における牧師職への諸挑戦

教会の根本的課題は、いうまでもなく「福音の証言」である。このなかで牧師が真に受けとめるべき諸課題は、福音の証言をその都度新しく、いまの時代に相応しい形にすることにある。そのために必要なのは、教会の働きは常に新しい挑戦の前につねに置かれていること、そして社会の状況を可能な限り教会がまず正しく認識することである。EKDは、自らを「共同（性）を必要とする教会」として社会の様々な変化を受け止めつつ、可能性とチャンスを見出すことの大切さを強調している。そのことで教会は新しい委託と結び付けられる。

今日の教会への挑戦として最初に取り上げられるのが、激変する社会構造とそれに伴う人口現象である。2030年に教会会員数が三分の一に減少した場合、教会の財政的基盤は約半分に落ち込むとの試算が以前からはじき出されている。教会税の著しい減少もその要因の一つである。ドイツ北東部および南部の州教会のアンバランスな発展は、教会間の経済均等だけでなく、全ての教会の連帯と共同形成が一層重要であることを示す。すこし古い資料になるが、EKDは客観的な数字から90年代以降の激しい変化の現実を指摘する。受洗者の数は1991年から2003年の間に25％後退し、結婚式はほぼ半分に、葬儀は17％減少、礼拝出席平均も陪餐会員の約4％と決して数字的に満足のゆくものではないと分析していたのである。教会退会者数は年々増加の一途を辿っているが、幼児洗礼、堅信礼、結婚、葬儀など人生の重要な節目や日常において遭遇する悲喜こもごもの個別状況に同伴や寄り添いを教会に求める人々も多い。伝統や旧慣習から洗礼、結婚、葬儀のあり方を今いちど見直すべきとの声を、筆者もドイツ滞在中に何度となく耳にした。

筆者が家族と共にホフガイスマルで出席していた教会では、年に5、6回は家族礼拝がおこなわれ、子どもと大人が喜びをもってともに参加できる合同礼拝のための創意工夫が丁寧になされていたのが印象的であった。多くの人々が現在と将来になにがしかの不安を抱えつつ、聖書の言葉のもつ力（説教）にいまもなお期

待を寄せているのが筆者にも感じられた。教会や牧師は、いま現実に起きている諸問題をいかに受け止め、それらの切実な課題を神学的にいかに解釈するべきかとの問いに対して誠実に応えることが求められている。これは、真の意味で教会が開かれているのかとの問いともつながっているのであろうか。

1983年から2003年までの20年間に旧西独で340万人、1991年以降旧東独で50万人がプロテスタント教会から退会し、その約12%は数年以内に再加入している。次世代への信仰継承の問題が教会への挑戦の一つであることは間違いなく、ドイツにおいては「伝統の崩壊」という深刻かつ危機的な状況がみられる。教会離脱の理由として多くの人々が指摘するのは、近年高騰した教会税の負担の重さである。東西統合に伴う連帯のための支出、それに介護保険が新たに加わっての教会税の増額である。そのため収入の半分近くを税金として納めることを国が国民の負担として求めることになり、当然、誰もが節約する道を模索せざるを得なくなった。国が教会税を徴収し、カトリック教会とプロテスタント教会に配分される。教会収入の約80パーセント強を占める税金は、牧師給、牧会活動の諸費用、教会堂建築、幼稚園、学校の運営、老人ホームの維持などに振り分けられる。

2008年当時、プロテスタント教会の専従者は23万3千人を数え、23州教会で2万4百人の牧師・神学者たちが働いていた。2030年には牧師職を大幅に削減せねばならず、そのことにより牧師一人につき説教する機会が20～30%増えることになる。すでに旧東独の教会では2ヶ所以上で説教を担当する牧師もおり、2030年にはそれが4～5ヶ所になると見込まれている。旧東独では、全体として現在3200の牧師数が1700に減ると予想されている。牧師の謝儀のみならず、教会堂維持の問題も指摘されている。全プロテスタント州教会の教会とチャペルの運用ならびに維持のための負担額は毎年10億円以上かかるといわれる。2022年2月、ロシアのウクライナ侵攻により、ドイツ教会をめぐる財政状況はますます厳しくなっている。

「全ての人が福音を必要としているように、全ての受洗者が人々に福音の証言をなすために召されている。そして全ての信仰者が神の前に互いに支え合う、そのような司祭になることが可能であるとの確信において、≪全信徒祭司制≫の教えが正当化される」。全てのキリスト者が教会形成に参与し、多種多様な参加の可能性がこの≪全信徒祭司制≫を具体化する。ここに、EKDが自らの教会を「共同を必要とする教会」と特徴付ける所以がある。

プロフェッショナルとしての牧師職とは何か。牧師はその職務において、まず

神の約束に信頼し、神の言葉に依りたのむ。その職務は、聴くこと、祈ること、説教すること、授洗すること、主の晩餐を祝うことである。さらに牧師は、神の言葉を聴くことにおいてのみ自らの職務を真実に受けとめることが可能であるがゆえに、この「聴くことと祈ること」は、何よりもまず牧師職のなかで最も重要な職務として位置づけられている。

3. 伝道者の訓練と養成の場としての PS

プロテスタント州教会の牧師訓練・養成の施設である PS は、牧師補の準備実習勤務を組織し、内容をプログラム化している。1934 年から 1937 年に強制的に閉鎖されたにもかかわらず、告白教会の PS は一つの特別な役割を果たしたといわれている。ディートリッヒ・ボンヘッファーのフィンケンヴァルデにおける「共なる生活」のモデルはいまなおドイツ・プロテスタント教会や各州教会の PS に少なからず影響を与えている。ボンヘッファーは、1935 年から告白教会の PS 所長として働く傍ら、世界教会のなかで告白教会のためのエキュメニカルなネットワーク作りに奔走する。PS での研修をとおして彼自身が支えられ、外部で迫害を受けている同労者の運命を PS の祈祷課題とした。「外なる奉仕のための最も内的な集中」が彼の PS のモットーであったが、牧師、キリスト者はこの世においていかにあるべきか、そのための霊的な養いと訓練が研修会の内容となっていったのである。「社会倫理と黙想、礼拝、祈り。これら告白教会 PS の 4 つの柱を、将来の富坂プレディガーゼミナールでもぜひ継承してほしい」と、2010 年 9 月に来日されたクラッパート教授は筆者に強く語ったことが忘れられない。

筆者が研修を受けたホフガイスマル PS は、実践神学と牧師研修の研究所であり、1891 年創設以来、牧師補訓練と継続教育の両者が結び付いて実施されている点で珍しい。信徒説教者の働きのための訓練、継続教育にもホフガイスマル PS は寄与している。その能力を認識し目覚め、維持し、新たにコンペテンツ（能力･スキル）を習得することが牧師補職の目的であるならば、牧師の継続教育はプロフェッショナルとしてのその能力と資格を在職期間において正しく熟考し、維持し、建て上げることにその課題があるといえよう。

神学教育と一次試験を終えた牧師補は 26 ヶ月教会に仕えるあいだに PS での研修（33 週）が義務付けられている。大学での神学教育と一次試験だけでは牧師として仕えるにはまだ不十分ということか。研修それ自体は 1 週間（実質 5 日間）でひとつのテーマが基本で、テーマによっては 3 週連続の時もある。牧師補訓練

で重要なのは、メンター（遣わされている教会の主任牧師）との話し合いとPSのコースで実際に経験したことを批判的に省察する点である。

ホフガイスマルPSにおける牧師補訓練と継続教育では、所長のほかに6名の研修主事（男女3名ずつ）と専任の音楽教師が従事している。ドイツの教会では数十年前からジェンダーバランスを意識的に取りいれ、PSにおいても組織、制度、運営などの面においてこの視座が重要視されている。筆者が約3年のドイツ滞在中に出会った牧師、研修主事、ディアコニー施設従事者たちのなかでも優れた働きや目覚ましい活躍をする女性たちの姿が印象に残っている。PSの研修主事の任期は5年だが、その後3年の延長が可能である。研修主事は、様々なコース（特に説教学、典礼学）において、専ら助言者として立つ。その内容は、他の様々な領域や教育諸施設の専門家との協力によってつくられる。二つの極、つまり「自分自身の経験」と「（実践）神学的考察」は、研修主事の人格とも結び合わされる。

PSでは月に一度、所長と主事たちのミーティングがある。筆者も毎回陪席したが、一ヶ月の業務報告、研修の中身に関する牧師補や牧師たちの反応や要望、運営一般、また、毎朝夕に行われる小礼拝メッセージ担当などきめ細かな確認と相談が入念に行われる。適切な助言や活発な質問が飛び交い、それぞれ自分の職務担当への責任を担いながらも、一人で課題を背負い込むのではなく、その問題を仲間同士で認識し、知恵を出し合いながら一緒に担い、克服していく。そのような信頼関係に基づいた人的体制と温かい雰囲気、居心地の良さが常に感じられた。朝と夕の静かな黙想と祈りの小礼拝の時間はその意味でも大切である。

筆者はこのPSで、説教、講義、祈りを担当し、レバノン、ロシア、インド、スイスなどの神学者、牧師、司祭、ラビたちと出会う機会も与えられた。

牧師職に求められていること

牧師補訓練と牧師の継続教育を隠退するまで受けることで、謙虚に自らを高めるべく努力し、その結果、牧師としての誇りと自信を保持し得るのかもしれない。神学的知識、社会倫理の研鑽、霊性の涵養、終末的信仰、エキュメニズム、ディアコニアなど大切な次元や課題は当然であるが、よく聞かれたのは、コミュニケーション力ともてなしの姿勢であった。みことばを聴くことはもちろん、相手に傾聴すること、祈り（とりなし）、キリストを中心とした交わり、異なる意見や立場の牧師との協働（Zusammenarbeit）、他者への信頼と尊敬などが求められる。筆者にとって、ヨヘン・コルネリウス＝ブンドシュー所長という優れた人格的指導

者をはじめ、個性豊かな研修主事の同僚、町の教会の牧師や信徒たちに出会えたことは大きな恵み以外のなにものでもなかった。信徒たちを尊敬し、積極的に働くボランティアなど、互いに支えあうネットワークがそこにはあった。教会は常に変革し続け、更新を必要とするコミュニティである。まさにこれこそが、宗教改革の精神にほかならない。

また、PSを支えているのは、所長や研修主事だけではない。ハウスマイスターや掃除担当者、食堂、秘書、会計事務を担う人々がプロフェッショナルとしての誇りを持ってそれぞれの業務に当たる。こういった人々の協働なしに全てのプログラムはおろか、PSの運営自体が成り立たない。一つのコミュニティハウスのなかでのチームワーク、対等な関係性の構築や相手への感謝と尊敬の念がいかに重要であるかが、研修する若い牧師補たちにもおのずと伝わっているようだ。ちなみに、研修期間中にかかる滞在費その他諸経費の殆どは州教会が負担している。牧師養成を州教会、各個教会、大学が連携して支えているのだ。

TKH（Theorie Kirchlichen Handeln）とエキュメニカル研修旅行

筆者は、「貧困と教会」「ボランティア」「国民教会と自由教会」などの主題のもとに行われた、TKHのゼミナールに参加した。ディアコニー施設や自由教会への訪問、実際に現場で働くボランティアへのインタビューなどをとおして、ドイツのプロテスタント教会は「頭の（アカデミックな）教会」ではなく、「手足の教会」、つまりディアコニア的な「祈りと実践の共同体」であることを改めて知った。TKHでは、神学的な研修や協議の前に、まず、統計社会学などの専門家を招いて現代ドイツ社会の貧困問題やヘイトクライムの実態、その社会的・政治的・経済的な背景について客観的に学ぶユニットから始まる。TKHとセットで、牧師補訓練の最後に行われるのが「エキュメニカル研修旅行」である。ヴァチカン、モスクワ、エストニアなどの国や都市を訪問し、ローマ・カトリック、東方教会をはじめ他宗教（ユダヤ教、イスラム教、仏教など）との出会いや対話を実際に体験する。按手をうけ、牧師として教会に仕える前に、こうしたエキュメニズムならびにディアコニアの両次元を認識するべきとの要請がEKKW（クアヘッセンヴァルデック州教会）の教会会議（総会）で決議されたからである。これらのテーマは、ここで終わることなく、牧師継続教育のなかでさらに深められる。

宗教改革の伝統を継承するドイツ・プロテスタント教会は、信徒と牧師が教会の協働者または福音の証言者として、世の困難な諸課題や挑戦の前に常に立たさ

れている。自らの賜物を惜しまず捧げ、喜びを携えて奉仕する信徒、また、牧師として召されていることに誇りを持つ教職者たちとの出会いは筆者にとってこの上ない励ましとなった。召命は、神と私個人の問題だけでなく、教会共同体の召命でもあるとの教会的理解がその根底にあるからではないか。牧師は、キリストの一つのからだなる教会共同体によって祈られ、召命を受けているがゆえに、その責任は極めて重いといわざるを得ない。だからであろうか、ドイツ人牧師や信徒の多くが、日本にPS制度がないことに驚きを禁じえない様子であった。ドイツでは「国民教会」はもちろん、日本のプロテスタント教会と同様に献金で成り立つ「自由教会」でさえも、伝道者養成・訓練のための研修はもはや自明のことであり、これは牧師個人の資質向上面だけでなく、教会共同体をより豊かに形成するうえで必要不可欠な制度となっている。ある牧師は筆者に、「PS研修中でのさりげない対話から牧会上の新たなアイデアやヒントが与えられた」と自らの体験を証していたことが忘れられない。

何より牧師の訓練と継続教育を全体的枠組みのなかでとらえ、牧師養成を第一（大学でのアカデミックな神学教育機関）、第二（牧師補訓練機関）、第三（按手から隠退までの継続教育機関）といった段階として位置づけ、州教会及び各個教会が責任を持ってこれを支えている。第一、第二、第三の教育段階が相互に呼応しあい、それぞれの目的と内実が批判的に吟味されることで、各段階の内容そのものが質量ともにより充実したものとなる。そのために、神学校と教会とPSの三者が密な連絡と相互の協力関係を維持することで、信頼に足る伝道者養成のシステムが確立され、信徒と牧師の真の役割が明確になるだけでなく、「信徒伝道者」という職務の位置づけも真摯に検討されるであろう。教会はいかなる時代状況に立つのか。このことが客観的に検証され、基本的な能力の発展に各自従事すること、そして牧師職のスキルを習得し、深めることが肝要であり急務である。上記のことを抜きにして教会共同体における真の協働は成り立たないと筆者は考える。

以下の二つのテーゼは、旧東独教会での決議である。

1. キリスト者は、すべてのいのちの創造者である神に信頼する。真理を神のみもとに求め、満たされたいのちをも神のもとに求める。このようなキリスト者の信仰が、不安よりも希望のほうが大きい生き方を可能にするのである。
2. キリスト者は、罪責を告白し、赦しをこうことがゆるされている。キリスト者の自由は、そこに根ざしている。この自由のゆえにこそ、自分のためにも、

他者のためにも、自分の責任を引き受ける覚悟が生まれるのである。

この二点は、世界のすべての教会にも当てはまることである。さらにボンヘッファーは、＜歴史における神の支配について＞以下のように述べる。

「神が全てのものから、どんなに悪いものからも、よいものを生じさせてくださることができるし、それを欲しておられると、私は信じる。そのために神が必要とされるのは、すべての事物を生かして、最善の役に立つようにすることができる人間たちである。どんな困窮の状態にあろうが、私たちが必要とする限り、抵抗することができるように、神が力を与えてくださることを、私は信じる。だが、それをあらかじめ与えておいてくださるようなことはなさらない。私たちが、自分たちを信頼せず、神のみを信頼するようになるためである。そのような信仰においてこそ、将来に対する不安が克服されるに違いない。私たちの失敗、過ちもまた無駄ではないこと、私たちの自分で思い込んでいるだけの善行よりも、失敗や過ちを処理することのほうが、神にとっては困難であるというようなことではないことを私は信じる。神とは無時間的な運命というようなものではなく、正しく向けられる祈りと、責任ある行為がなされることを待っておられ、応えて下さる方であることを、私は信じる」。

1990年ドイツ統一まで、教会は多くの人々のための避難所であり続けたといわれている。旧東ドイツのライプチッヒにニコライ教会がある。当時、この教会は自分の使命を果たすことができなくなってきた人々の代理者としての働きを引き受けたという。作家たち、またその他の反体制派の人々は、諸教会のなかで集会を開いた。他の建物の部屋は、こういう人々には閉ざされてしまっていたからである。教会は教会で少人数で礼拝と祈祷会を毎週月曜日に続けていた。そこからデモ行進が生まれるのである。やがて時（カイロス）が来て、小さな祈りのともし火が燎原の火のごとく平和行進として広がり、ベルリンの壁を崩した。教会の規模は小さくても、そこで聖書の言葉（十字架の福音）が語られ、聞かれ、祈りと礼拝、賛美を絶やさぬ限り、必ず決定的な時（カイロス）が接近し、豊かな実を結ぶ。その祈りの火をそれぞれの場でともし続けることが大切なのであろう。個々の教会があって、日本の教会、各教派がまとまって、ようやく世界の教会と

結びつくという発想は聖書にはない。最初にイエス・キリストの一つの教会、エキュメニカルな教会があって、そうしてそれぞれの国、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、アジアなどの個々の教会がある。歴史はまだ浅いかもしれないが、信徒も牧師も謙虚に学ぶ姿勢をともに持ちつつ、もっと自信と誇りを持って働くべきである。たしかに現在の状況を正確に把握するうえで資料や統計の数字は必要である。しかし、教会の内外における現場で人と出会い、その声に真摯に耳を傾ける謙虚な姿勢、そしてそこから育まれる想像力や感性なども牧師のスキルの一つとして重要ではないだろうか。職務においてあらゆる喜びと重荷のなかにあって牧師は聖書の言葉によって勇気を経験するのだ。

「私は福音を恥とはしない。なぜなら福音は、信じる者全てを救う（祝福する）神の力であるから」（ロマ1：16）。

神は私たち全ての者が、神と共に働く者になることを期待しておられ、私たちの業と祈りを祝福してくださる。

おわりに

ドイツの教会で学んだことの一つは、牧師は全ての人にとって対話の相手であるために全ての教会員の賜物を見極め、諸課題を一人で背負うのではなく分けあうべきであり、そのためにジェネラリストであることが求められる。その一方で、福音信仰の証言者として神学的指導を担うがゆえに牧師はスペシャリストであるべきなのである。しかしながら、牧師の専門性が問われ、自他に対する厳しい吟味や批判が求められることは、牧師が教会のなかで何もかも為すべきである、ということを意味しない。信徒一人ひとりのスキルや特性を把握し、それぞれの賜物を互いに生かし用いる機会を開くという意味において、牧師はジェネラリストであるべきなのである。自分自身の限界を知ることは、相互性を考えるうえで一つの基本である。多くの課題に直面して自らの限界を知るなかで、働き、生活することができればと考える。そのような関係性に置かれているのが牧師職であろう。協働の視点から課題を認識し、それらをいかに配分し分かち合うかが問われている。専従、兼務、ボランティアの協力者と牧師の共同の働き、つまり「協働」が福音の証言にとって必要なのである。

一つの研修テーマを一週間で行うプログラムとその方法を日本の文脈にどう置き換えるかが大きな課題であろう。この課題を、2022年度から富坂PS準備会で検討している。富坂でこれまで実施されてきた現地の牧師研修やクラッパート合

同研修会の成果をふまえつつ、この働きのために少しでも貢献できればと願う。とりわけ、沖縄宣教研究所とのエキュメニカルな共同研修会の積み重ねがあって、はじめてこの富坂プレディガーゼミナール構想が再スタートし得たことを心に刻みたい。

牧師研修制度は未だ日本にはない。ドイツと比べて教会の歴史と規模も何もかもが違う。マイノリティで規模も小さい。しかし悲観的になるのではなく、かといって開き直るのでもなく、ドイツの教会やPSとの交流を継続し、その方法を謙虚に学びつつ、日本でなすべきこと、日本の教会、少数者だからこそできることをこれから見出す必要がある。主の導きに信頼し、御心を尋ね求めつつ、祈りをもって、日本でのPSの実現に向けて備えるものでありたい。そして近い将来、沖縄をはじめ北東アジアの信徒と牧師の継続教育のためのプレディガーゼミナールがアジア各地域において自主的かつ定期的に実施されることを富坂センターの構想、ビジョンの一つとして掲げたい。そのチャレンジこそが、キリストの一つのからだなる教会を土台とする信徒はもちろん、信徒から献身する牧師の訓練による個々の成長が教会を豊かに建て上げるだけでなく、福音に逆行するこの世界において神の国（真の平和と和解）建設の実現（すべての人々の益・公益）にかならず貢献するものと確信するからである。

〈参考文献〉

・Predigerseminar der Evangelischen Kirche von Kurhessen-Waldeck, “*Kontext 2002 – aus dem Leitbildprozess der Studienleiterinnen und Studienleiter am Evangelischen Predigerseminar in Hofgeismar*” 2002.

・Ein Impulspapier des Rates der EKD, “*Kirche der Freiheit. Perspektiven für die evangelische Kirche im 21. Jahrhundert.*” 2006.

・DIDASKALIA 53 Schriftenreihe der Evangelischen Kirche von Kurhessen-Waldeck, “*Das Amt des Pfarrers und der Pfarrein in der modernen Gesellschaft*” 2004.

・Gemischte Kommission / Fachkommission Ⅰ, “*Gemeinsame Standards für die 2. Ausbildungsphase 1. Grundsätzliches: Kompetenzen und Ziele*”.

・Gemischte Kommission / Fachkommission Ⅰ, “*Gemeinsame Standards für die 2. Ausbildungsphase 1. Grundsätzliches: Kompetenzen und Ziele*”, 2006.

・Werner Hassiepen und Eilert Herms, “*Grundlagen der Theologischen Ausbildung und Fortbildung im Gespräch*“, 1993.

・Matrix der Deutschen PS-Konferenz 2008-12, “*Kompetenzen für den Pfarrberuf*“ 2008.

・*Martin Hoffmann, “Predigerseminar”, “Religion in Geschichte und Gegenwart. Band 6 vierte, völlig neu bearbeitete Auflage*” 2003, Tübingen.

・Evangelischen Kirche Berlin-Brandenburg-schlesische Oberlausitz, "*Pfarrerin und Pfarrer als Beruf. Ein Leitbild für die Evangelische Kirche Berlin-Brandenburg-schlesische Oberlausitz mit einer Musterdienstvereinbarung für den Pfarrdienst*" 2004.
・Dietrich Bonhoeffer, "*Nachfolge*", hrsg. von Martin Kuske und Ilse Tödt, 1989.
・Dietrich Bonhoeffer, "*Ethik*", hrsg. von Ilse Tödt, H-E-Tödt, Ernst Feil und Clifford Green, 1992.
・Dietrich Bonhoeffer, "*Konspiration und Haft 1940-1945*", hrsg. von Jørgen Glenthøs, 1996.
・Ruth Gütter, "*Tyrannenmord als ethischer Grenzfall – Dietrich Bonhoeffers Weg in den Widerstand*", Vortrag am 19.09.2006.